

「 腹腔鏡下大腸手術 アプローチ & スタンダードテクニク」

腹腔鏡下大腸切除研究会 編集

帝京大名誉教授

山 川 達 郎

大腸癌に対する内視鏡外科手術の意義を追求することに情熱を傾けられてこられた、自治医科大学大宮医療センター小西文雄教授を代表世話人とする、腹腔鏡下大腸切除研究会が編集された「腹腔鏡下大腸手術—アプローチ & スタンダードテクニク」と題する単行本がこのたび発行されました。先生はその目的を達成するためには、術式の定型化、データの集積による遠隔成績の分析、トレーニング法の確立が不可欠であり、その手段としてはまず研究会の設立が必須であることを、かつて日本内視鏡外科学会教育委員会委員長を務めていた小生に、熱っぽく話して下さったことを今も鮮明に思い出することができます。確か1998年ごろだったかと思いますが、大腸癌研究会のプロジェクトに先生の考えが取り上げられたのに相前後して腹腔鏡下大腸切除研究会が設立され、以降、同会はたゆまず発展を続けてきました。このたびその成果をこのような立派な単行本としてまとめられたことは、誠にご同慶の至りです。内容は、第一線でご活躍中の著者

ら各人が、固執し、試行錯誤しながら極めた術式の現況を、それぞれ外側、内側アプローチ法、後腹膜アプローチ法などと命名して、懇切丁寧に紹介しています。術式の選択は、一般にいかなる方法で腹腔鏡下手術を始められたかによって決められていると思われるかもしれませんが、原則は皆同じでありますから、これではなくてはならないという規則はありません。ことに手術の難易度は、病変部位、患者さんの体格、手術既往の有無などによっても異なり、また場合によってはいろいろな工夫を必要とするので、まずは今回発行されたような優れた手技解説書を座右に置き、参考にしながらいかなる事態にも対処できるように技術を磨き、その手技を自分のものにすることが大切です。

しかし内側と外側アプローチの手法はともに腹腔内の手術であり、その時々々の腹腔内の状況によりそれぞれの手技の応用がより合理的な手術に連なることがありますから、両者の手技に等しく通じておくべきです。一方、後腹膜アプローチは、泌尿器や整形外科領域の内視鏡下手術

にも応用され、注目を浴びている手技で、知っているのと役に立つ手法ですが、バルーンの挿入法1つをとってもちょっとしたコツがあります。そんなところが、本書では大変要領よく説明されていますので、本書は実際の手術の際に直ちに役立つ貴重な手引書であるということが出来ます。

しかしながら、一読すると一見簡単にできそうな術式のような気がするかも知れませんが、腹腔鏡下大腸切除術は一種の advanced surgery であり、二次元の視野下での高度な鉗子操作技術が要求される術式です。したがって初心者のみならず、ある程度の腹腔鏡下大腸切除術を経験した外科医が読んでも参考になりますので、ぜひ、皆様には本書を座右に置かれ、実際の臨床に役立たせてほしいと願っています。

● B5 頁118 2002 定価(本体 8,000円+税)

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)